

「暗示」という人間の性能に切り込んだ「桑原俊郎」

文 秋山真人

Text by Makoto Akiyama

前回は、人をいやす、つまり、マインドフルネスとか、ヒーリングと言われている分野で、先駆的役割を果たした俳人、水原秋桜子の祖父、水原實を紹介した。

今回は「暗示」という不可思議な人間の性能に切り込んだ桑原俊郎についてふれてみたい。

西洋の思想が、怒涛の如く流入した明治の時代。それは日本人の精神において、分岐点の時代であったことは御存知の通りであるが、ここでは二つの大きな作業が自然発生的に行われていった。

一つは、とにかく「吸収」である。西洋！すごい！面白い！これは時の政府も、なかば手放しで後押しをした流れ。西洋の情報、ヒト、モノは、あつという間に我が国の文化に染み渡ってゆく。

もう一つは、「整理」である。西洋文化に毒はないのか、私たち日本人のアイデンティティーはどこへ行くのか。

この二つめのテーマが問題で、私たちの文化は、この明治西洋化の整理が、上手い終結点を見出せなかった分だけ、折れ曲がってしまったと言っては言い

すぎだろうか？

結果として、平和と言いながら、子供に軍服を着させて学校に通わせる習慣は今に残ってしまった。これは憲法論議などのずっと手前にある問題である。

話を本題にもどそう。今回、紹介する桑原俊郎は、この西洋化のただ中で、教育の現場にいた教師であった。

明治三二年、静岡師範学校（後の静岡大学）で教諭を務めていた桑原は、西洋の催眠術の技法を訳した『魔術ト催眠術』（近藤嘉三、一八九二）なる本に引きつけられた。

内容にあった暗示と催眠を身近な人々で実験したところ、次々に他者を催眠にかけることに成功し、催眠で能力を開発したり、病をいやす方法を実践し、プロの霊術家に転身してしまう。

明治四三年、「精神霊動」という催眠を発展させた、能力開発の解説書を残している。その中には、催眠状態にある人間が、透視能力や、金属曲げ（現代のスプーン曲げに類する現象）を発現させたという記録まであるのだ。この書が当時大ベストセラーとなった。

この本の冒頭、桑原は催眠術の被術

よって起きるといふ二つの側面が研究され続けている。気の部分の作用と考えられるものをメスメリズムと呼び、言語暗示と思われるものをヒプノシスと呼んで区別する流れも出てきた。

一九〇〇年代の終わり頃、私は、ロシアや中国といった共産圏の国々が、この手の見えない力を伝統的に研究してきたというウワサを知り、日本のTV取材班と共に、現場をレポートしたことがある。

ロシアには、TV画面から宇宙飛行士にヒーリングをする能力者がいたし、中国では、五〇〇〇人を集めて毎日、気功で人をいやす人間国宝のような人物までいた。

科学的な研究もおどろくほど進んでいたが、ペレストロイカとほぼ同時に（一九八〇年代後半から九〇年代初頭）その技術はアメリカなどの企業に買い取られ、表舞台から消えていくことになる。

しかし、そういった精神的能力の開発発技術が、明治〜大正期に、世界最強の水準にあったのは、日本であり、それが、中国の気功開発の基礎になったり、ロシアの心理学を含む能力開発理論や米国の能力開発に影響を与えたことは、あまり知られていない。

パクられても気にしない、のは、日

者に対する可能性を二つ上げており、

第一は、病気をいやすことができるということ、第二は、宗教家の説く所用、神通力などと言われる能力が、ある程度、合理的にコントロールできる中で、行うことが可能だということだった。その説に関する実験例を三十数例上げており、後に、日本でも人気が高まる、精神分析家のユングの説いた集合無意識などの論理を先取りして展開している。

近年、TVのショーなどでも催眠術は、あまり、行われなくなつた。

桑原が、あの世から今の日本を見たら、やはりガツカリするのかもしれない。催眠は「洗脳」などという言葉と整理がなされぬまま、いりまじり「あやしいもの」という位置づけのままである。

催眠という技術は、西洋発であるが、メスメル（一七三四〜一八一五）という人物によって、世界中に広められた。メスメルは、催眠という現象が術者の身体から発する「動物磁気」なるものによって起こるとしたが、今では、何かはまだ未解明であるが「気」のような見えない力が働く現象と、単に言葉やしぐさによる心理学的な暗示に

という著作を残し、陸軍中野学校の創設者の一人である藤田西湖についてふれてみたい。

本人のゆとりなのかも知れないが、今や、日本の最大の輸出品目であるアニメの世界も、版權がすっかり整備されたのは、ごく最近のことである。

日本の能力開発技術が、海外に流出したのは、国内で、正しくあつかわれなかつた研究者が大陸などに出ていったそのノウハウを教えたこと、また、そのノウハウの中でも重要なものが陸軍中野学校などに集約され、敗戦と同時にロシア、アメリカに持ち去られたことが大きい。

日本では催眠術は「あやしい」と言われるが、世界では、現在も、自国のイメージを、相手国にどう印象づけるかという催眠術戦が続いている。それによって株価まで動くのだからたまたまのものではない。

そういえば、日本の政治でも、一時印象操作なる言葉が流行したが、催眠術の負の側面がよみがえりはじめていると感ずることがある。SNSで、いいねをたくさん押されている情報がいい情報などと信じこみ続けているらう、気がつくとも顔もわからない人に催眠術をかけられていた、などということがないように願いたいものだ。

今回は、防衛に超能力が使えないかという可能性を研究した超人、三田光一、そして、「忍術からスパイ戦へ」

Profile

大正大学大学院卒。十代の頃、スプーン曲げ少年として取り上げられ、警察、郵政、雑誌編集長など様々な職をへて、現在は、モバイル企業の大手顧問、コンサルタント、さらに画家としても活動している。イマジニア株式会社にて立ち上げたモバイルコンテンツ、「開運夢診断」は、二億アクセスを超えるメガヒットとなった。国際気能法研究所所長。マインド・アンティーク博物館館長。宗教・スピリチュアル、精神世界のアドバイザーとして長期的存在。一九六〇年生まれ。分野の垣根を越えた広い人脈と交流。

